

小林健二

結
晶
の
世
界

幼いころから透質のものが好きでした。さざれた硝子の破片や透明なさえあればとりあえず何でも好きになったのです。プラスチック製の宝石も消しゴムも、クラゲや下敷きでさえ、そのようなものを光に透かして見ているのが好きだったのです。ですから科学博物館で水晶と出会ったときは、まさに心を奪われたという感じでした。

20年くらい前「鉱石ラジオ」というものにのめり込んだ時期がありました。そんな折、工作を楽しんでいる中でクリスタルイヤフォンは自作できないものかしらと思ったのです。おそらく「クリスタル」というところにとり分け惹かれたのでしょう。それはちょうどミョウバンや塩の結晶をつくるように、ロッシェル塩という物質で行うものなのですが、ぼくは当初の「圧電効果を供なう結晶」をつくるというよりも、水溶液の中に析出してくる透明な結晶のほうに不覚にも再び心をもって行かれてしまったのです。

さすがにこの結晶は見つづけていても見る見る成長するということはありませんが、日に日に変化を確認することはできます。やがては薬品問屋の方からも今月は何ですか？と言われるほど多種の成分での結晶育成を試みるようになってしまいました。透き通った赤や青、黄や紫、緑やピンクといったいろいろなものから、水晶の群晶のように無色の柱状のものもあれば、蛍石のように四角いものなどさまざまな形のものまで、まさに「安定した生活」を投げ打っての自己中心世界旅行真っ最中であつたのです。

そんなある日偏光フィルターを使って結晶を接写しているときに、結晶先端の溶液に霧もやのようにゆらいで見えるものを見た気がしました。一つの幻であつたのかもしれませんが、しかしそのイオンの流れのように見えたかもしれない何がしかの働きが、溶液中に結晶を析出さ



表紙◎
藤幡正樹「禁断の果实」
平版[オフセット4色刷り]
400×400mm 1990年

こばやし・けんじ……1957年東京生まれ。'77年より作品発表を始め、音楽、絵画、詩、映像などボーダレスな活動を行う。作品集や著書などが出版されるなか、'97年、電源もなく放送をキャッチする受信機について書かれた『ぼくらの鉱石ラジオ』（筑摩書房）が話題を呼ぶ。最近では、所蔵している鉱物標本を展示した「地球に咲くものたち（石と賢治のミュージアム/2005）」が開催された。

C o n t e n t s

2 技術に会う 3

結晶の世界 小林健二

4 HITACHI FILE talk+

- 1 [talk] 刻々変化する水害状況を、パソコン上でリアルタイムにシミュレーションする
山口悟史
[+] 洪水シミュレーション
- 2 [talk] ダブルスキン構造とFSW技術で、これからのアルミ車両のスタンダードを提案した「つくばエクスプレス」
石川彰弘
[+] つくばエクスプレス図鑑
- 3 [talk] 身の周りのエコエネルギーを発掘する「やまホテル構想」
酒井孝寿
[+] 日本の一次エネルギー供給の推移

10 特集 モノづくり教室——つくる、学ぶ、伝える

- 11 ① 溶接する
- 12 [対談] 現代モノづくり考 佐々木正人×美馬のゆり
- 13 ② 設計する
- 15 ③ 切削する
- 17 ④ 試作する
- 18 ⑤ 伝承する
- 20 [座談会] モノづくり力の時代 天田満明×寺本義也×清水盾夫
- 21 ⑥ 曲げる
- 23 ⑦ 塗る・磨く
- 25 ⑧ 改善する

26 technobscure 3 鈴木理策「サント・ヴィクトワール山」

28 永瀬唯のサイエンス・パースペクティブ 3

エレベーター・エスカレーター——人の流れを支える立体の道

32 HITACHI Information

34 日立総研 CLICK ON! research report 3

MEMS——小さな賢い機器が生活を豊かにする
河添宏

せていることは間違いないことです。ギ酸ストロンチウム二水和物やクロム酸リチウム三ナトリウム六水和物、硫酸プラセオジム八水和物といった一般的にはおそらく聞き慣れない物質たちが、まるで天然世界の気の遠くなるような時間の中でなされる神秘の光景を、かいま見せてくれたように感じたのです。

それは無生物と言われる彼らの世界に何か美しい姿を現す一つの技術や感性を想起させてくれたとも言えるのです。言い換えるのなら、感性という溶液の中で析出し育成してゆく技術とでもいうのでしょうか。便利さや利益、ムダや競争とはかけ離れた、ただ美しいというだけの世界であっても、美しさとは何かといった一言では語りつくせない多様な要素を孕んでいると考えたとき、自分を含む人の世は彼らからはどのように写っているのだろうと、ふと想ったりもしたのです。